新時代を担う人たちへ

卒業生・修了生の皆様、ご卒業おめでとうございます。ご家族の皆様には、この良き日を迎えられましたことを心よりお祝いいたしますと共に、これまでの本学へのご支援とご協力に深く感謝申し上げます。

皆さんが鶴見大学に在籍した数年の内に、世の中の価値観は大きく変容しました。新型コロナウィルスの蔓延はパラダイム転換の一つのきっかけに過ぎず、大きなうねりはそれ以前から始まっていたように感じます。

近代社会は国家の成長や個人の豊かさを追い求め、付随して生じる問題をテクノロジーの進化によって克服してきました。いえ、克服したつもりでいただけで、ひょっとするとどうにもならない問題を、大気や海洋を含むどこか、あるいは他の地域に住む誰かに押し付けてきただけなのかもしれません。そのつけが、目に見える現象としては、自然破壊による熱帯雨林の減少、温暖化と海面上昇による洪水、大雪のような災害の多発、サンゴや海洋動物の死滅、食料や水の不足といった、世界規模、地球規模の問題として私たちの目の前に立ちはだかっています。こうした地球規模の問題を前に人文学は無力でしょうか。否、こうした現象が人々の価値観やそれに基づく行動の結果である以上、その価値観の更新を図ることこそが人文学の果たすべき役割であるに相違ありません。

具体的には、上記のように、「大気や海洋を含むどこか」「他の地域に住むだれか」と言う時の「どこか」「だれか」とは何を指すのか、すなわち、自他の線をどこに引いているのか、その線引きはどのような価値観に基づいているのか、線の外側を「本質的ではない何か」と見なして不当に負担を押しつけてはいないかといった問いを、自分自身に直接関わる問題として常に考え、顧みることが必要なのではないかと思います。

感受性豊かな人は、中高生の時代にクラスや学年の中で、発言力を持つ人が機会や高い評価を独占し、周辺的な弱者が間接的にせよ常に何かを差し出さねばならない仕組みに違和感を抱いた経験があるのではないでしょうか。ある個人や集団が経済的に成長し文化的に洗練されていく際に出る澱（おり）のようなものを周辺に押し付けてなかったことにする、あるいは、「中心」の豊かさや発展のためには「周辺」の多少の犠牲は仕方がないと考える、そうした価値観を前提とするといった点において、地球規模の問題と、ある社会の片隅で起こるような一見些細な問題とは通底しているように思います。そうした人間中心主義や強者の論理はいまや過去のものになりつつあります。

未来の皆さん、無意識に引いた線で誰かを・何かを苦しめてはいませんか。これからの時代に必要なのは、無意識に引いた線や線の外側にある人・事・物に対する態度が、より広範な問題をふまえた際になお適当であるのか、時々の社会の状況を歴史に照らして検証し、未来を見定め、理想的なあり方との距離を測ってアップデートしていく力です。

新時代にこそ文学部での学びの真価が発揮できるはずです。諦めないで。頭を働かせて、前を向いて。新たなステージでの皆さんのご活躍を心から祈念しています。

令和６年３月14日

文学研究科長・文学部長

新沢　典子